



えと文

中堀 愛作

比叡山を見る

九月の空、第二学期が始まる。岩倉の生徒たちが、比叡山を見ながら通学する季節だ。

桜の咲く第一学期には、花は、麓の方から咲きだしてケープブルカアの道沿いに、だんだん上の方に咲いて行き、而して漸て全山新緑に移る五六月頃の美しさは本当に見事だった。十月から十一月になると山肌は赤茶、黄土色に変って行き、夕陽を受けた赤比叡の景色に私は幾度目を見張ったか知れない。

曾て高校にいた頃美術の時間に、西の田圃の方から、或は以前あったラグビー場の東の小さい池の辺から、また北の運動場の土手から種々の季節の比叡を写生させたものだ。

水絵や油絵で思い思いに描いていた高校生姿が今日も目に浮んでくる。

同志社人と比叡山は昔から深いつながりを持っているのだが、毎日比叡山の姿を見るだけでも、いつのまにか、心が澄み渡るのではないだろうか。